

堂ヶ嶋遺跡 上妻遺跡
童子丸遺跡 石貫遺跡
寺崎遺跡

妻北地区下水道敷設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書IV

2008

宮崎県西都市教育委員会

序

古く、日向国を中心地であった西都市には多くの文化財が分布しております。これらの貴重な文化財を後世に伝えるのは我々の責務であり、本市では文化財の保護、活用に努めてきていますが、各種の開発事業によって影響を受ける埋蔵文化財・遺跡については、記録保存のための発掘調査を行っています。

西都市教育委員会では、平成19年度公共下水道事業に伴い、西都市大字三宅、童子丸、右松所在の堂ヶ嶋遺跡、童子丸遺跡、上妻遺跡、石貫遺跡、寺崎遺跡の発掘調査を行いました。本書は、その遺跡調査概要報告書です。

今回の調査では石器、古墳時代後期・奈良時代の堅穴住居跡、掘立柱建物跡を構成すると考えられる柱穴掘方、土地区画と考えられる溝状遺構、それに伴う古代の土器破片・瓦片が出土しました。

今回の調査により得られた成果は、西都市の古代を理解するためには極めて重要なものです。

本報告が学術的な研究のみでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるための一助となれば幸いです。

なお、調査にあたってご指導・ご協力いただいた、西都市上下水道課、宮崎県教育庁文化財課、また発掘調査・整理作業にたずさわっていただいた方々、並びに地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成20年3月21日

西都市教育委員会

教育長 三ヶ尻 茂樹

例　言

1. 本書は、西都市教育委員会が西都市上下水道課下水道係の委託を請け、平成19年度実施した妻北地区に所在する遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 現地調査は、平成19年6月28日から平成20年2月29日まで行った。
3. 発掘調査は、西都市教育委員会が主体となり実施した。
4. 調査は、1区・B区の一部を黒木裕平、1区、2区、A区、B区、C区、D区を津曲大祐が担当した。
5. 調査及び図面作成は、黒木・津曲が行い発掘調査者全員で補助した。
6. 遺物の実測・拓影は津曲が行い、遺構・遺物の浄きは津曲が行った。
7. 本書の執筆・編集は津曲が行った。
8. 本書に使用した方位は、座標北（G. N.）と磁北（M. N.）である。
9. 本書に使用した標高は、海拔絶対高である。
10. 報告書に用いた色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局他監修の『新版標準土色帳』に準拠した。
11. 調査地点は調査年度－路線名－調査地点番号で記号化した。また、起債事業の路線名は補助事業と区別するためにアルファベットで示した。
12. 本書に使用した遺構記号は、SA＝竪穴住居跡・SB＝掘立柱建物、もしくはそれを構成すると考えられる柱穴・SD＝土坑、SP＝ピットである。

目 次

| | | | |
|-----------------------|---|-----------------|----|
| 第Ⅰ章 序説 | 2 | 第1節 遺跡の現況 | 7 |
| 第1節 調査に至る経緯 | 2 | 第2節 遺構と遺物 | 7 |
| 第2節 調査の体制 | 2 | | |
| 第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境 | 3 | 第Ⅳ章 小結 | 19 |
| 第Ⅲ章 各遺跡の調査 | 7 | 報告書抄録 | 25 |

挿図目次

| | |
|--|--|
| Fig 1. 周辺遺跡分布図 (1/25,000) | Fig10. A - 37地点出土遺物実測図 (1/3) |
| Fig 2. 調査区位置図 1 (1/5,000) | Fig11. A - 1・23・37点位置図 (1/5,000) |
| Fig 3. 調査区位置図 2 (1/5,000) | Fig12. A - 1・23・37地点遺構・土層実測図 (1/40・1/100) |
| Fig 4. 1 - 2・13・20地点遺構・土層実測図 (1/40・1/100) | Fig13. A - 1 地点SD 1・SP 1 出土遺物実測図 (1/3) |
| Fig 5. 1 - 2・13・20地点位置図 (1/5,000) | Fig14. C - 5・7・8 地点遺構・土層実測図 (1/40・1/100) |
| Fig 6. 1 - 2・13・20地点出土遺物実測図 (1/3) | Fig15. C - 5・7・8 地点位置図 (1/5,000) |
| Fig7. 1 - 20地点出土遺物実測図 (1/3) | Fig16. C - 7・SA 1 出土遺物実測図 (1/3) |
| Fig 8. 2 - 11地点遺構・土層実測図・出土遺物実測 図 (1/40・1/100) | |
| Fig 9. 2 - 11地点位置図 (1/2,000) | |

図版目次

| | | | |
|------|--|--|--|
| PL 1 | 1.1 - 2 地点遺構検出状況 2.1 - 2 地点SA1 (北) 3.1 - 2 地点SA1 (南) 4.1 - 2 地点SA1 遺物出土状況 5.1 - 2 地点SA1 土層断面 6.1 - 13 地点遺構検出状況 7.1 - 13 地点SA 1・SA 2 8.1 - 13 地点SA 2・SA 1 | 7. A - 23 地点遺構検出状況 8. A - 23 地点SA 1 | |
| PL 2 | 1.1 - 13 地点SA 2 炉跡 (土器埋設) 2.1 - 13 地点SA 2 土層断面 3.1 - 14 地点SA 1 4.1 - 14 地点SA 1 土層断面 5.1 - 20 地点遺構検出状況 6.1 - 20 地点SA 1 7.1 - 20 地点SA 1 遺物出土状況 8.1 - 20 地点SA 1 土層断面 | PL 4 | 1. A - 23 地点SA 1 遺物検出状況 2. A - 23 地点SA 1 土層断面 3. A - 37 地点遺構検出状況 (南) 4. A - 37 地点遺構検出状況 (北) 5. A - 41 地点遺構検出状況 6. A - 41 地点SA 1 7. A - 41 地点土層断面 8. C - 5 地点遺構検出状況 |
| PL 3 | 1.2 - 11 地点遺構検出状況 2.2 - 11 地点SB 1 3.2 - 11 地点SB 1 土層断面 1 4.2 - 11 地点SB 1 土層断面 2 5. A - 1 地点遺構検出状況 6. A - 1 地点SD 1・SP 1 | PL 5 | 1. C - 5 地点SE 1 2. C - 5 地点SE 1 土層断面 3. C - 7 地点遺構検出状況 4. C - 7 地点遺構検出状況 (南) 5. C - 7 地点SA 1 6. C - 7 地点SA 1 炉跡 (土器埋設) 7. C - 7 地点SA 1 土層断面 8. C - 8 地点遺構検出状況 9. C - 8 地点SA 1 土層断面 |

第Ⅰ章 序説

第1節 調査に至る経緯

当地区に所在する遺跡の発掘調査については、妻北下水道敷設事業に伴い実施したものであり、平成16年度事業からの継続事業である。内容は現在、市道、県道として利用されている道路に下水道管を敷設する工事で、工事区域に隣接して西都原古墳群の支群や日向国府跡が所在し、周辺地での埋蔵文化財調査例が多くあるため、事業主である西都市都市計画課（当時）と協議した結果、遺構・遺物が出土した場合の現状保存が困難であると判断し、記録保存を目的とした本調査を実施した。

第2節 調査の体制

事業主体 西都市役所 上下水道課 下水道係

| | | |
|------|---------|--------|
| 調査主体 | 教育長 | 三ヶ尻 茂樹 |
| | 社会教育課長 | 荒川 昭英 |
| | 同 補佐 | 楠瀬 寿彦 |
| | 同 主幹兼係長 | 冀方 政幾 |
| | 同 主任主事 | 簽瀬 明宏 |
| | 同 主任主事 | 黒木 裕平 |

| | | |
|------|--------|-------|
| 調査担当 | 同 主任主事 | 黒木 裕平 |
| | 同 主事 | 津曲 大祐 |

調査指導 日高正晴（西都原古墳研究所長）

発掘作業 緒方タケ子、押川ツル、金丸美保、黒木トシ子、児玉征子、篠原時江、
関治代、長谷川クミエ、浜田スミ

整理作業 長谷川明美、中原昭美

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 立地

本調査区は、宮崎県西都市の中心に位置する。現在の西都市街地からは直線距離にして約1kmである。

九州山地から東に伸びる丘陵が一つ瀬川により浸食され流域に沿い沖積平野を形成し、その平野を挟んで洪積世台地が南南東に伸びる。一つ瀬川からみて西側が国特別史跡西都原古墳群の広がる西都原台地である。本調査区は西都原台地の東側から南東に広がる中間台地で、標高は約20mの位置にあり、西都原台地との比高差は約30mである。

このように当地域の地形は九州山地から伸びる丘陵が河川の浸食により形成された平野と八つ手状に伸びる洪積世台地から成り、その台地上や台地縁辺に遺跡が集中するといった特徴がある。

第2節 歴史的環境

西都原台地上を中心に縄文時代から近世にかけて多くの遺跡が所在する。

主要な遺跡を概観すると、まず台地上の東西4.0km、南北2.0kmの範囲に広がる国指定特別史跡・西都原古墳群があげられる。古墳時代前期から終末期までの古墳群であり、その構成の通時性と同時期における多様性、良好な遺存状況は稀有の事例であり、宮崎平野部の古墳時代を理解する上で多くの情報を持つものである。

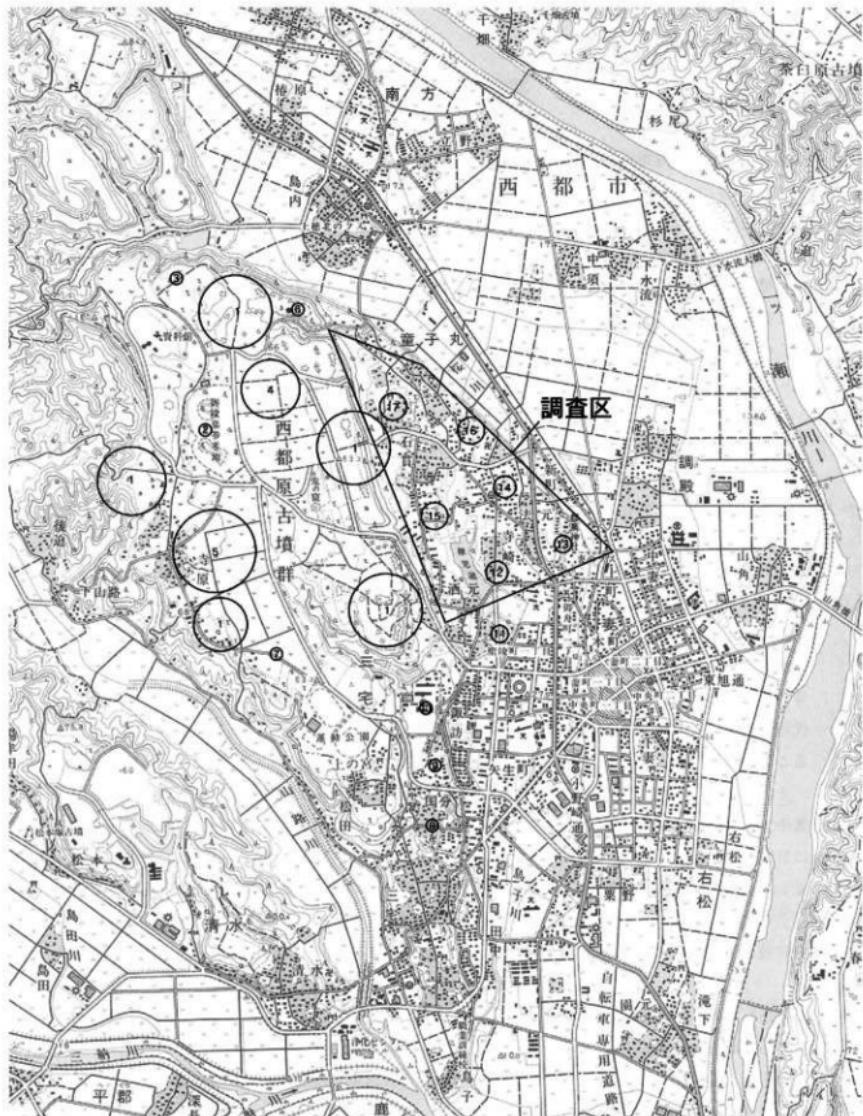
この西都原台地は古墳群により有名であるが、その台地の北西端には縄文時代早期の集石遺構が確認され、台地中央部には縄文時代後・晚期、弥生時代中期～後期前半の住居跡が確認されており、古墳時代以前から当地域の生活遺構が所在する。また台地東北端には弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての集落である新立遺跡があり、台地南端部の寺原地区には古墳時代の集落が所在することが予想される。

また、台地の東側から南東側にかけて、約30m下った標高には中間台地が広がっており、遺跡が集中する。その中間台地の北側に位置する寺崎地区には日向国府跡、南東側に位置する国分地区には日向国分尼寺跡（推定）、南に日向国分寺跡が所在する。その他、西都原古墳群の支群も点在し、堂ヶ崎地区、国分地区においては平成12～13年度に地下式横穴墓群も調査された。同地域内である童子丸地区、剣田地区を中心に6～7世紀以降の住居跡も多く確認されることから、当地域は複数時期に渡り墓域や集落として利用されて現在に到る広域の複合遺跡として評価することができよう。

前述したように本調査区もこの中間台地であり、今年度の調査の中心は日向国府跡の北西側と西側にあたる地区で堂ヶ崎遺跡・上妻遺跡・童子丸遺跡・石貫遺跡が該当する。

前年度まで調査で、古墳時代から奈良・平安時代の住居跡・古墳の周溝・溝状遺構などが検出されており、時期の特定が可能なものもある。

調査は下水道埋設部分のみを対象とするため、狭く長いものになり、個々の地点で検出された遺構、遺物の性格を決定づけるに十分でないが、調査地点が広範囲にわたるため、各地区における遺構、遺物出土状況から複合遺跡内をさらに色分けする根拠を得ることができるものと考える。



1. 西都原古墳群 2. 御陵墓 (男狹塚・女狹塚) 3. 丸山遺跡 4. 西都原道路 5. 寺原遺跡
 6. 新立遺跡 7. 原口第2遺跡 8. 日向国分寺跡 9. 国分寺遺跡 10. 日向国分寺尼寺跡
 11. 酒元遺跡 12. 寺崎遺跡 (日向国衝跡) 13. 上妻遺跡 14. 法元遺跡 15. 堂ヶ鳩遺跡
 16. 童子丸遺跡 17. 石貫遺跡

Fig. 1 平成19年度 調査区の位置と周辺遺跡 (S = 1/25,000)



Fig. 2 平成19年度 調査区位置図 1

0 20m
1 : 5,000



Fig. 3 平成19年度 調査区位置図 2

0 20m
1 : 5,000

第Ⅲ章 各遺跡の調査

第1節 平成19年度調査区の設定と概要

1. 調査区の設定

平成19年度の調査区は下水道敷設工事の工区に沿って設定した。一部の工区を慎重工事とした以外は本調査をおこなった。各調査区の位置関係と調査区番号はFig. 2・3に示した。総延長1677m、総調査面積は1366m²である。

2. 調査の方法

調査は協議の結果、作業の安全性を考慮し、幅0.8m～1m、現地表面から約1mまでの深さを対象にする。調査対象の下水道敷設路線が現在道路であるため、周辺地住民の生活に及ぼす影響を最小限に抑える必要があることから、調査は基本的に1日で完結する形態をとった。そのため、1日に進む延長は1日で調査を終了し、埋め戻しが完了して現況に復旧できる範囲となり、約10mを基本単位として調査に臨むこととなった。しかし、遺構や遺物が集中して複数日調査が必要な場合は鉄板で仮復旧して調査を継続する。逆に後世の削平等で遺構が残っていない地点については復旧が可能な範囲で調査延長を延ばした。

第2節 遺構と遺物

1. 1区の調査 (Fig. 2・3)

A. 遺跡の現況

本調査区は堂ヶ嶋遺跡である。1丁区の調査前の現況は、アスファルト舗装された市道293号・294号で、延長269m、面積215m²である。

平成13年度に行った当地域の確認調査で、周辺から堅穴住居跡を多く検出していたので遺構の存在が予測できた。

重機で慎重に舗装路盤を剥ぎ、一部深く掘削し基本層序を把握して、遺物等の有無を確認しながら調査を進めた。

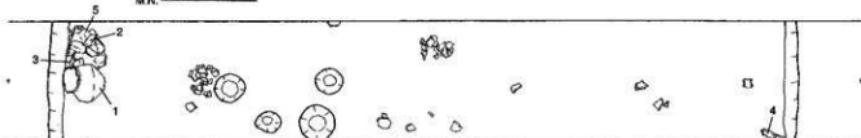
B. 遺構と遺物 (Fig. 4・5・6・7)

1-1～6・14～20地点：市道294号上で、溝状遺構・堅穴住居跡・ピット群を検出した。時期は6世紀後半～7世紀、奈良・平安時代にあたる。調査範囲全体に遺構が確認できる。特に古墳時代後期～終末期段階にあたる堅穴住居跡が注目できる。1-2地点から検出されると、後の調査地点でも続けて検出された。道路拡幅に伴う調査で道路脇を掘削したところ同時期の堅穴住居跡が検出され、平成13年度に行った確認調査においても近辺で堅穴住居群が平面検出されており、周囲に集落が広がることが推定できる。

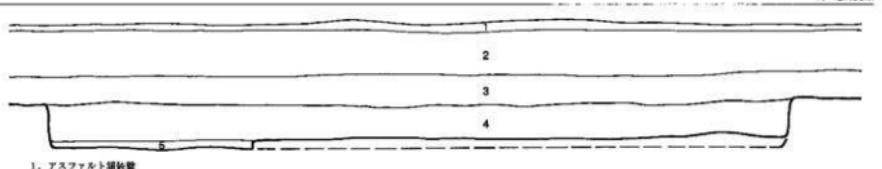
堅穴住居跡は重複することなく検出されており、ほぼ同時代の遺構群と考えられよう。

2地点で検出された堅穴住居跡と考えられる掘方は1辺6.1m、深さ30cmを測る。土器の甕が破片で多く出土した。

19-1-2地点 SA1 M.N.



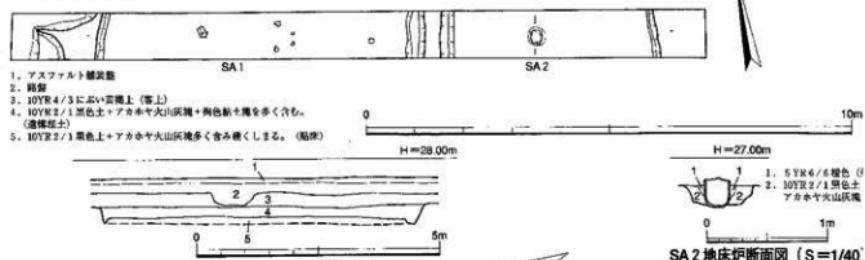
H=27.80m



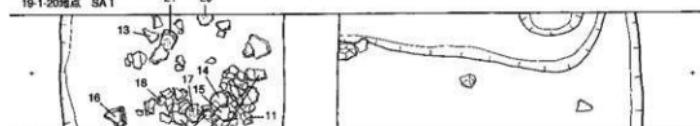
1. アスファルト鋪装盤
2. 路盤
3. IOYR 3/2 黄褐色土・礁など含む。しまりなし。
4. IOYR 2/1 黒色土+アカホヤ火山灰+褐色粘土塊多く含む。
(造様底土)
5. IOYR 3/1 黒色土+4/4 黄褐色土塊多く含む。硬くしまる。(底土)

1:40

19-1-3地点 SA1・2



19-1-20地点 SA1



1. アスファルト鋪装盤
2. 路盤
3. IOYR 3/1 黒色土+アカホヤ火山灰+褐色粘土塊多く含む。
4. IOYR 1/1 黑褐色+アカホヤ火山灰+褐色粘土塊多く含む。しまりなし。
5. IOYR 2/1 黑色土+細かい褐色粘土塊含む。

H=28.00m

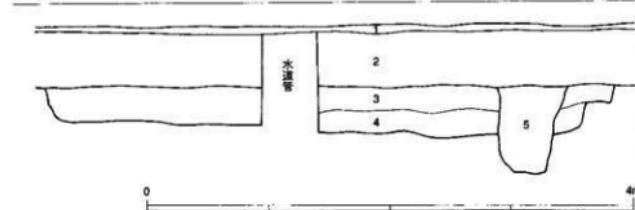


Fig. 4 1-2・13・20地点造様土層実測図 (S = 1/40・1/100)

Fig. 5 1-2・13・20地点位置図 (S = 1

3・5・6地点においても竪穴住居跡が検出されており、地床炉をもつものがある。出土遺物は土師器の破片が多い。

14地点と20地点でも竪穴住居跡と考えられる遺構が検出された。特に20地点では土師器を中心に多くの土器破片が出土し、須恵器も共伴している。1辺4.8m・深さ約30cmを測る掘方である。

15・18・19地点はピットが集中して検出された。15地点では掘立柱建物が想定できる箇所がある。

1～7～13地点:市道293号上で、1～1～6・14～20地点の西側に入る枝線にあたる。溝状遺構・土坑・竪穴住居跡・ピット群を検出した。

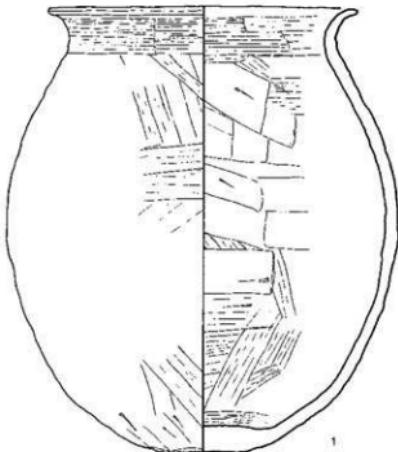
7地点～10地点まではピット群や溝状遺構が検出されており、一部は掘立柱建物を構成する可能性がある。

11地点～13地点では4軒の竪穴住居跡と考えられる遺構を検出した。11地点の掘方が1辺5.8m、深さ10cmを測り、12地点の掘方は5.2m、深さ20cmである。13地点では2軒の竪穴住居跡と考えられる掘方が検出され、それぞれ1辺6.7mと4.4mの幅を測り、深さは約25cmである。土師器壺・高壙等に須恵器壺破片が共伴している。

出土遺物 (Fig. 6・7): 遺物は平安時代～近世に至るまで土師器・須恵器・陶磁器・石器等が出土している。

1～5は1～2地点SA 1から出土した土師器壺破片である。1は中型壺で2/3が残存する。復元口径18.9cm、頸部径16.3cm、器高27.4cmを測る。色調は外面10YR 7/3にぶい黄褐色、内面10YR 8/4浅黄橙色を呈し、胴部下半に煤が付着する。胎土は緻密で褐灰色・赤褐色・褐色の砂粒が多く含まれ粗く、他に長石や雲母も極少入る。調整は口縁部に回転横ナデ、胴部は不定方向のナデが施されるが不明瞭である。内面は工具ナデがヨコ～ナメに施される。2は壺口縁破片で復元口径22.5cmを測る。色調は内外面10YR 7/4にぶい黄橙色で胎土は精良な粘土をベースに褐灰色や赤褐色の砂粒を多く含む。口縁端部が丸く仕上げられ、接合痕が見える。摩滅が著しく調整は不明。3は復元口径18.8cm、頸部径17.3cm、内外面10YR 8/4浅黄橙色を呈す。胎土は精良な粘土ベースに褐灰色・褐色の砂粒を多く含む。調整は口縁部をヨコナデ、胴部は内外とも工具ナデがヨコに施される。4は口縁部が外反する壺で復元口径21.2cm、頸部径18.5cm、外面10YR 8/3浅黄橙色、内面10YR 7/4にぶい黄橙色を呈す。胎土は緻密で赤褐色・褐灰色の砂粒をわずかに含む。口縁部～頸部にかけて平行タタキの痕跡がかすかに残る。2次調整は不明瞭だがナデであろう。口縁部ヨコナデ、内面胴部は工具ナデがヨコ・ナメに施される。5は口縁～頸部・底部である。口径22.4cm、頸部径19.9cmを測り、底部はやや突出する。胎土は緻密で褐灰色・褐色の砂粒を多く含む。内外面7.5YR 8/6浅黄橙色を呈す。口縁部ヨコナデ、胴部から底部にかけてタタキの痕跡がわずかに残る。特に底部は格子日の叩き痕がナデにつぶされる形で残る。胴部は内外とも工具ナデがタテ～ナメに施される。

6～9は1～13地点SA 1・2から出土した土師器と須恵器である。6はSA 2の地床炉として使用された壺で胴部が丸みを帯びる。頸部径19.4cm、胴部最大径22.8cmを測る。胴部上半部は赤褐色を呈す。二次加熱による変色の可能性が高い。底部は住居跡床に埋没していたが、煤が付着しており、転用の痕跡か。胎土は褐灰色の砂粒が多く含まれ粗い。内面は7.5YR 7/4にぶい黄橙色を呈す。調整は外面をタテに工具により強くナデ、内面は幅の狭い工具で強く立タテ～ナメにナデ上げ、砂粒が動く。7は土師器の高壙ではほぼ完形である。口径13.8cm、底径5.6cm、脚根径7.7cm、壙高



1



2

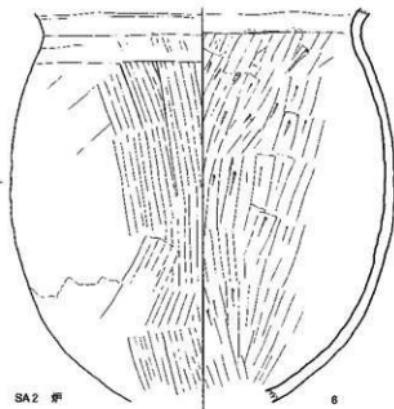


3



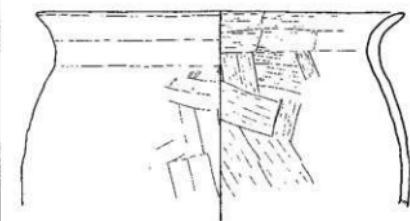
4

19-1-2 SA 1



5

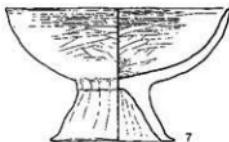
6



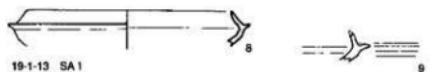
5



SA 2 #P

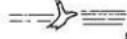


7



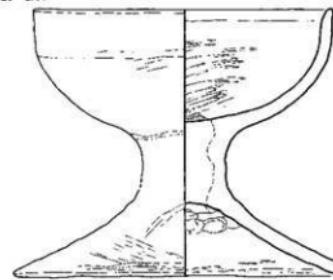
19-1-13 SA 1

8



9

19-1-20 SA 1



10

0 1 : 3 10cm

Fig. 6 19-1-2 + 13 + 20地点出土遗物实测图

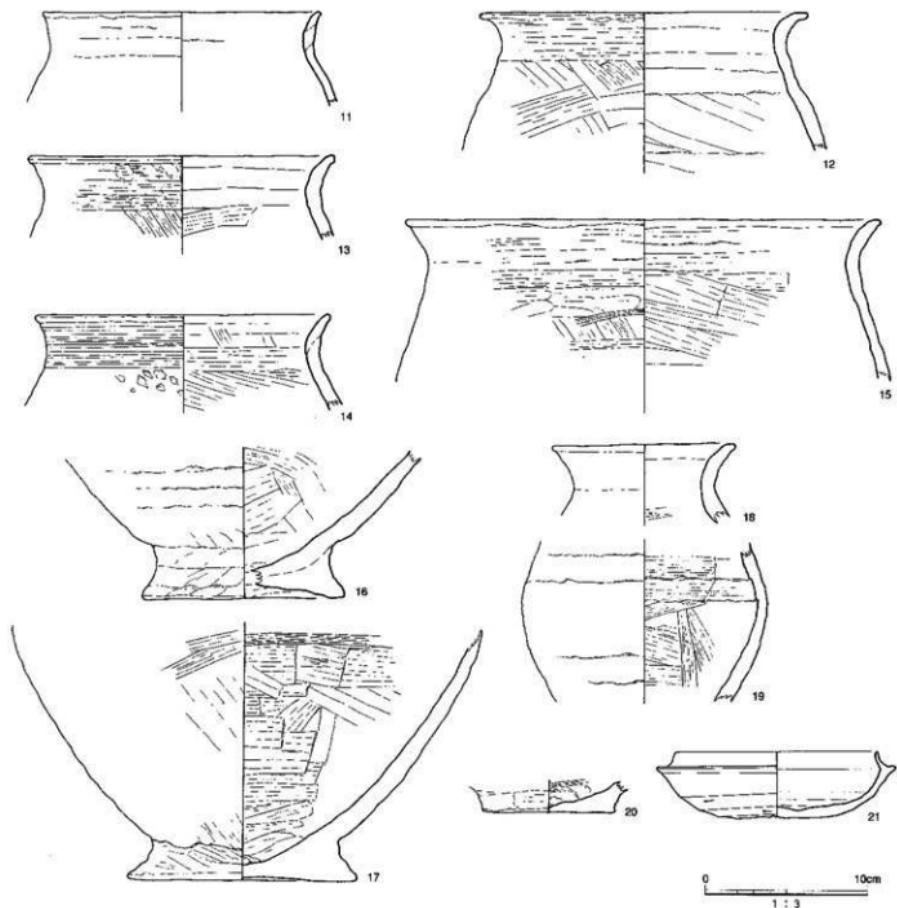


Fig. 7 19-1-20地点出土遺物実測図 (S = 1/3)

3.2cm、脚高5.0cmの器高8.2cmを測る。外面7.5YR 7/8黄橙色、内面5 YR 6/8橙色を呈す。胎土は緻密でわずかに褐色砂粒を含む。坏部は内外面とも細かいヨコミガキが施され、内面底部は中心から放射状にミガキ痕が見られる。脚部との接合がタテに強いナデで、脚部もタテナデが施される。8は須恵器坏身で復元口徑12.6cm、受部径14.0cm、受部最大径14.8cmを測る。焼成は良好で胎土は粗く、長石、石英を多く含む。9は須恵器坏身口縁部破片で精良な胎土である。

10~21は1~20地点SA 1から出土した土師器と須恵器である。10は高坏で1/2が残存する。口徑18.2cm、脚部径5.6cm、脚裾径20.8cm、器高16.4cmを測る。外面2.5YR 5/6明赤褐色、内面7.5YR 6/6橙色で全体的に赤色顔料による彩色がなされる。胎土は緻密で橙色粒を多く含む。坏部内面に細かいヨコミガキの痕跡があるが、外面は摩滅が著しい。11は壺で口徑17.0cm、頸部径

16.5cmを測る。精良な粘土をベースに褐灰色粒が多く含む。内外面10YR 8 / 3 浅黄橙色を呈す。摩滅が著しい。12は復元口径20cm頭部径18.1cmを測る。外面10YR 8 / 3 浅黄橙色、内面10YR 7 / 3にぶい黄橙色を呈し、精良な粘土に赤褐色。褐灰色の砂粒が多く含まれる。口縁部～頸部はヨコナデ、胴部は工具ナデがナメに施される。13は復元口径18.8cm、頸部径16.9cmを測る。精良な粘土に褐灰色粒が含まれる。内外面7.5YR 8 / 4 浅黄橙色を呈し、口縁部ヨコナデで端部が丸くなる。工具によるナデが胴部に施される。14は復元口径18.0cm、頸部径16.7cmを測り、外面10YR 8 / 3 浅黄橙色、内面10YR 7 / 4 にぶい黄橙色を呈し、褐灰色、褐色の砂粒が多く含まれる。口縁部～頸部にかけて強いヨコナデが施され、外面には格子目の叩き痕がわずかに残る。15は大型甕で口径29cm、頸部径26.8cmを測り、精良な粘土ベースに褐灰色粒が多く含まれる。外面10YR 8 / 3 浅黄橙色、内面10YR 8 / 2 灰白色を呈す。接合痕が明瞭で工具ナデが胴部に施される。口縁端部が丸く折り返される。16は甕か鉢の底部で復元底径12.2cmを測り、外面10YR 8 / 3 浅黄橙色、内面10YR 4 / 1 褐灰色を呈す。緻密で粗い胎土。外面に接合痕が明瞭に残る。17も底部で底径14cmを測り、外面10YR 8 / 4 浅黄橙色、内面10YR 7 / 2 にぶい黄橙色を呈す。緻密な粘土に褐灰色・橙色粒が多く含まれる。外面調整は不明瞭だが、内面は強いヨコハケ、ナデが施される。底部に接合痕が残る。18は壺口縁部破片で復元口径11.1cm、頭部径8.6cmを測る。赤褐色粒が多く入る粗い胎土で、調整は不明である。19は壺胴部破片と考えられる。胴部最大径15cmを測り、調整は難で内外面とも接合痕が残る。内面にヨコ、タテナデが施される。20は甕の底部で底径8.2cmを測る。底部内面に強い押さえが見られる。21は須恵器壺身で口径12.3cm、受部径13.8cm、受部最大径14.6cm、器高4.0cmを測る。外面5PB 7 / 1 明青灰色、焼成は良好、緻密な胎土で長石、石英を含む。口縁部回転ヨコナデ、外面底部を回転ヘラ削りで仕上げる。底部中央に工具痕あり。

2. 2区の調査 (Fig. 2・3)

A. 遺跡の現況

本調査区は寺崎遺跡である。現況はアスファルト舗装した市道1199号上である。地形は北側より次第に傾斜し低くなる。周辺は住宅地と畠地で、道路部分が数十センチ低いことから削平を受けている可能性が高い。調査区終点は国指定史跡日向國府跡の西側に隣接することから注意して調査を進めた。

延長は258.4mで、調査面積は232m²である。

B. 遺構と遺物 (Fig. 8・9)

2-1～3地点：現地表面から約70cmで遺構を検出できる。東西に横切る溝状の掘方を各地点で検出した。幅は3～5mと広いものがある。2地点や3地点で調査区東側に沿って掘方が検出される。

一旦、東側に逸れては部分的に現れる。

2-4～5地点：4地点では南北方向に伸びる溝状遺構を検出した。検出土面がかなり下層で、削平された状態である。幅60cm・深さ約20cmを測る掘方である。方向から、昨年度18-E-3地点で検出した溝状遺構につながる可能性をもつ。

2-7～10地点：路盤が厚く、IH路面が現路盤の下にあり、かなり地形が削平されているので、遺構検出土面は現地表面から約70cmである。

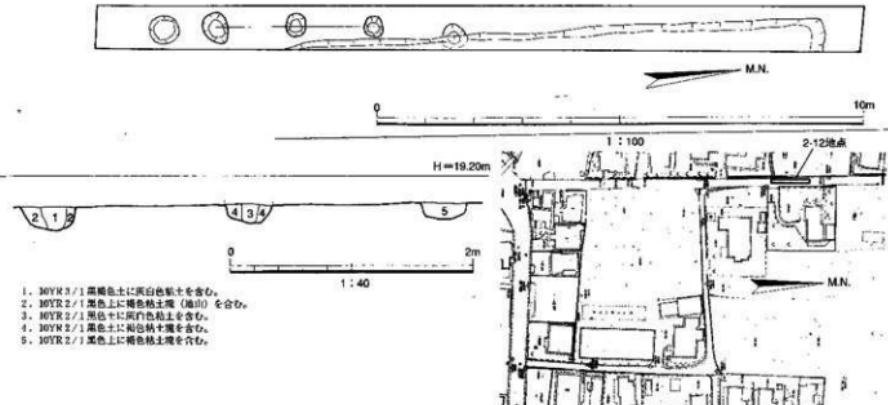


Fig. 8 2-11地点遺構土層実測図 ($S = 1/40 \cdot 1/100$) Fig. 9 2-11地点位置図 ($S = 1/2,000$)

地山は細かい砂利を含む礫層に近い質感である。この範囲では調査区の東側や西側に沿って10~15m・深さ20cmの掘方が検出された。埋土はやや締まっており、遺物は龍泉窯系陶磁器の破片や白磁片が多く出土する。性格は不明である。

2-11~13地点: 11地点において掘立柱建物を構成するとみられる2間の柱穴が検出された。ビット埋土中央に白色粘土が入っており、柱痕跡と考えられる。奈良・平安期の遺構である可能性が高く、日向国府跡指定範囲の北側にあたり、近接する地点であることから、同時期の建物が所在していた可能性を持つ。柱穴の掘方は径40cm、土層で確認できる柱痕跡は径15~20cmである。

2-14~17地点: 日向国府跡指定範囲の西側に位置するが、道路敷設時の掘削により、地山は残っていないかった。その上、西側に埋設してある水道管の掘方が調査区の半分以上を占めるようになり、残存部分も路盤と客土を除去すると礫層になる。

3. A区の調査 (Fig. 2・3)

A. 遺跡の現況

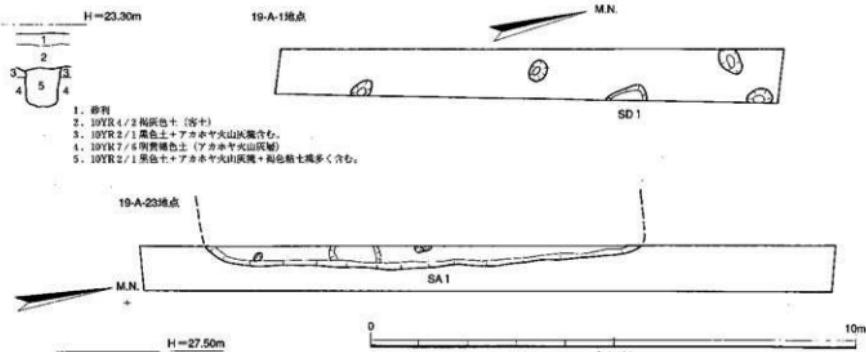
本調査区は、堂ヶ鳩遺跡である。稚児ヶ池西側に位置した狭幅の枝線と稚児ヶ地住宅5号棟の西側から直線的に北に延びた市道294号とその支線である。延長757.7mで、調査面積606m²である。

B. 遺構と遺物 (Fig.10・11・12・13)

A-1~3地点: 稚児ヶ池の西岸になる。アカホヤ火山灰層が良好に残存しており、現地表面から約90cmで遺構が検出できる。1地点では土坑が検出され、土師器壺が完形で出土した。調査区の壁にかかる遺構が出土したので全体は分からない。2地点ではビット群、3地点では溝状遺構と不整形な掘方を検出した。

いずれも平安時代の遺構である。

A-4~17地点: 294号から西都原台地に向かい入る枝線で、アカホヤ火山灰層は良好に残存するが、遺構密度は低い。現地表面から約50cmで検出した。4地点ではビットが5基検出され、須恵器破片などが出土した。その他の調査地点は地山の残存状況は良いが、遺構はビットや土坑・溝状遺



西都原古墳群245号墳

Fig.10 A-37地点出土遺物実測図



Fig.11 A-1・A-23・A-37地点位置図 (S = 1/5,000)

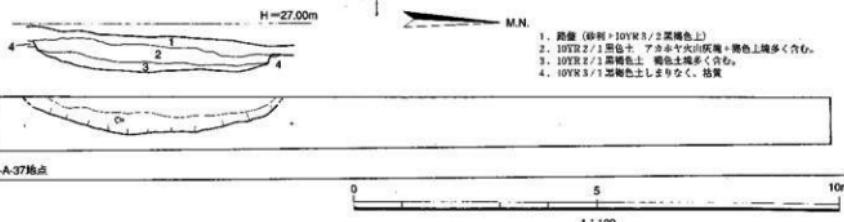


Fig.12 A-1・A-23・A-37地点遺構・土層実測図 (S = 1/40・1/100)

構が検出されるに止まる。

周辺での堅穴住居跡の検出例が多いことから、多くの遺構が検出されることが予想されたが、西都原台地麓に向かい、空白地が広がっている可能性が高い。

A-18~20地点：294号から東側に入る袋小路で、地山が良好に残る。多くのピット群が検出された。ピットの中にはしっかりした掘方をもつものがあり、掘立柱建物を構成する可能性があるが、はっきり柱穴列と判断できるものはない。土師器破片等が埋上から出土した。また、幅1.5m・深さ40cmのしっかりした溝状遺構が検出された。

A-21~23地点：市道294号上で最も北側になる。21地点の北側は水路になっており、そこで地形は下り、旧河道になる。幅80cmの溝状遺構が検出された。23地点では地形も安定し、堅穴住居跡と考えられる掘方を検出した。1辺約9m・深さ20cmを測る堅穴住居跡で土師器壺等が破片で出土した。

A-24~29地点：294号から西都原の麓に向かう枝線である。アカホヤ火山灰層が良好に残るが、遺構密度は低い。28~29地点は地形が急激に落ち、谷状になる。約15mで地山にあたると考えられる。294号に向かい次第に地形は上がっていくものと推測できる。

A-30~38地点：西都原古墳群の堂ヶ嶋支群が所在する。35地点で西都原248号墳の横を調査したが周溝と考えられる遺構は検出されなかった。墳丘の南側で地下式横穴墓の堅坑が検出されたこともあり、関係遺構の検出が予測されたが、不整形なピットが検出されたのみである。

37地点では西都原245号墳の横にあたり、周溝と考えられる掘方の外側を検出した。道路敷設時に墳丘が削平を受けるが、この掘方を周溝端部と仮定すると径18mほどの円墳になると考えられる。

A-39~41地点：西都原の麓から293号に延びる狭幅の枝線である。周間に水路があることから湿地帯と予想していたが、地山が良好に残存する。40~41地点で堅穴住居跡と考えられる掘方を3軒検出した。1辺5m~8mで検出面からの深さは約20cmである。土師器の破片が出土した。

A-45~50地点：谷状を呈した地形の落ちを確認した。数条の溝が検出されたが、多くは自然流路と考えられ、地形を侵食して逢初川や稚児ヶ池に流れ込んだものである。

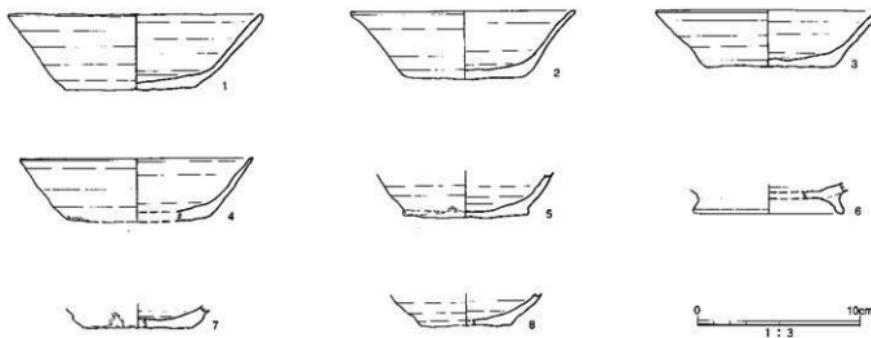


Fig.13 A-1地点SD1・SP1出土遺物実測図

出土遺物 (Fig.10・13) : Fig.10はA-37地点で出土した模倣壺蓋である。復元口径13.6cm、器高4.3cmを測り、緻密な粘土に雲母、橙色粒がわずかに含まれる。外面5YR 5/4にぶい赤褐色、内面2.5YR 5/6明赤褐色を呈す。内外面とも細かいヨコミガキが施される。Fig.8の1～8はA-1地点の土坑とピットから出土した上師器である。1～4はSD1から出土した。1は口径15.5cm、底径8.0cm、器高4.6cmを測り、胎土は緻密な粘土をベースにわずかに褐色粒・光沢粒が含まれる。内外面7.5YR 7/6橙色を呈す。回転ヨコナデで仕上げられ、底部を回転ヘラ切り。2は口径13.7cm、底径7.4cm、器高4.2cmを測り、緻密な胎土で外面7.5YR 7/6橙色、内面5YR 7/6橙色を呈し、壺部は回転ヨコナデ、底部は回転ヘラ切り後ナデが施される。3は口径13.6cm、底径7.8cm、器高3.5cmを測り、胎土は緻密で内外面10YR 8/4浅黄橙色を呈す。壺部は回転ヨコナデ、底部は回転ヘラ切り。4は復元口径14.2cm、底径8.7cm、器高3.9cmを測り、緻密な胎土で内外面10YR 8/4浅黄橙色を呈す。壺部回転ヨコナデ、底部は回転ヘラ切り。5～8はSP1出土で、5は復元底径7.7cm、胎土は精良で橙色粒をわずかに含む。内外面7.5YR 8/6浅黄橙色を呈し、壺部回転ヨコナデ、底部は回転ヘラ切り後ナデ。6は塊で復元の高台掘削9.2cmを測る。緻密な胎土で内外面7.5YR 8/6浅黄橙色を呈す。回転ヨコナデで仕上げられる。7は復元底径6.6cmを測り、緻密な胎土で外面5YR 6/6橙色、内面7.5YR 8/4浅黄橙色を呈す。壺部回転ヨコナデで底部を回転ヘラ切り後強いナデ。8は復元底径5.6cmを測り、精良な胎土で外面7.5YR 8/4浅黄橙色、内面10YR 8/3浅黄橙色を呈す。壺部回転ヨコナデ、底部を不定ナデで仕上げる。

4. B区の調査 (Fig. 2・3)

A. 遺跡の現況

本調査区は寺崎遺跡である。現状はアスファルト舗装された市道1199号上とその枝線で、2区の起点から北側になる。周辺は住宅地と畑地である。延長127.7m、調査面積102m²を測る。

B. 遺構と遺物

B-1～2地点：昨年度の18-E-1地点から南に向かい掘削した部分である。ピット群と近世の土壤基を検出した。地山は現地表面から約80cmで検出できる。

B-3～12地点：市道1199号上で、現地表面から約80cmで地山に至り、次第に深くなる。終点の12地点では、地山は現地表面から12mを測る。

3～5地点にかけて約15mの長さで地形が約50cm落ち込み、再び立ち上がる。性格は不明である。

6～8地点にかけて調査区の東側に掘方が検出された。溝状遺構になるか不明であるが、自然の傾斜ではない。埋土中からは中世の遺物が出土している。検出面から深さ30cmを測る。

12地点において、最も地山は深くなり、性格不明の遺構から須恵器の破片が出土した。包含層の可能性が高い。

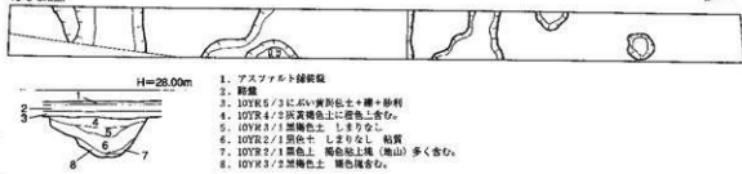
5. C区の調査 (Fig. 2・3)

A. 遺跡の現況

調査区は石貫遺跡・童子丸遺跡になる。市道279号を境に区画される。標高も高い。調査地点は支線が主体で、複数の路線になる。

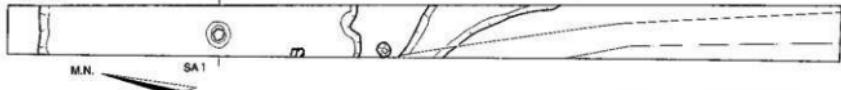
延長184.2m、調査面積147m²である。

19-C-5地点



M.N.

19-C-7地点



M.N. SA1

SA 1 地压炉実測図

S = 1/40

1. 5 YR 6 / 6 黄褐色 (地表)
2. MOYR 2 / 1 黑褐色 やかせい

H=27.70m

1 : 40 1m

1. アスファルト舗装

2. 路盤
3. IOYR 4 / 3 に近い黄褐色土 (表土)
4. IOYR 2 / 1 黑褐色土 しまりなし (透構土)
5. IOYR 2 / 2 黑褐色土 アカモヤ火山灰塊多く含む。
6. IOYR 3 / 3 黄褐色土 黄褐色土塊多く含む。
7. IOYR 3 / 1 黄褐色土 アカモヤ火山灰含む。

19-C-8地点

M.N.

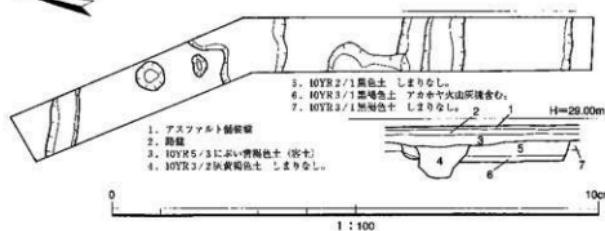


Fig.14 C-5・7・8地点縦構・土層実測図 (S = 1/40・1/100)

Fig.15 C-5・7・8地点位置図 (S = 1/5,000)

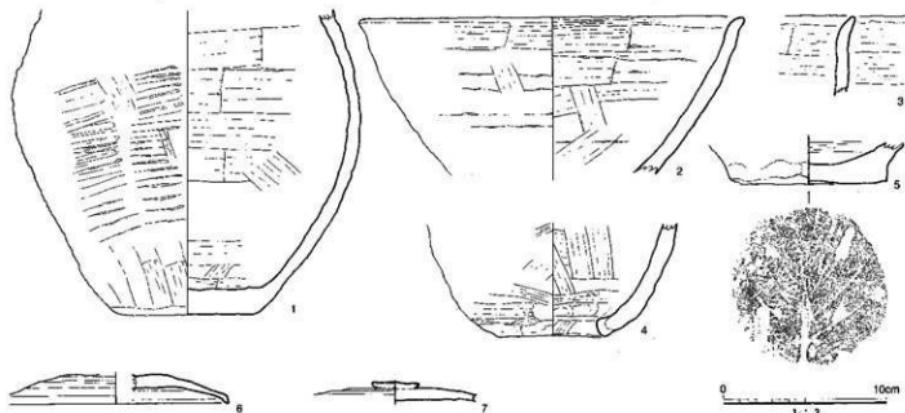


Fig.16 C-7地点 SA1出土遺物実測図 (S = 1/3)

B. 遺構と遺物 (Fig.14・15・16)

C-1～8地点：石貫神社の裏に廻る市道281号で、地山はアカホヤ火山灰層が比較的良好に残る。現地表面から約40cmで検出した。

1地点と2地点では大型の土坑が4基検出された。径1.4m・検出面から深さ約90cmを測る。ほとんど遺物を出土しないので性格は分からぬが、柱穴列を構成するとは考えにくいくことから、後世の搅乱（植樹等）の掘方である可能性が高い。

周辺地に大規模な調査が及ぶ場合は注意が必要である。

5～8地点は遺構密度が高い。豊穴住居跡と考えられる掘方を3軒検出した。7地点で検出したものは1辺6.5mを測り、地床炉をもつ。また、溝状遺構もしっかりした掘方のものを3条検出しており、土器や須恵器の破片が出土する。5地点と6地点で検出したものは、幅1.5m・検出面からの深さ50～60cmのもので、東西方向に横切る。

また、後世の搅乱も著しく、調査区間に渡り、側溝の掘方と考えられる溝が延びる。

C-9～12地点：9地点のみ童子丸遺跡であるが、盛土による造成地で遺構・遺物はない。

10～12地点は地山が良好に残っていた。現地表面から約30～40cmでアカホヤ火山灰層に至る。

アカホヤ火山灰層は薄く堆積し、ピット群を検出した。一部、埋土中から土器片が出土する。

出土遺物 (Fig.16)：1～7はC-7地点SA1から出土した土器類と須恵器である。1は地床炉として使用されていた甕で確実に住居跡に伴う。底径8.5cm、胴部最大径21.2cmを測り、底部は平底。胎土は粗く、褐色粒・褐灰色粒を多く含む。外面10YR 7/3にぶい黄橙色、内面10YR 4/1褐色を呈す。

胴部には平行タタキ痕が残り、後にナデが施される。内面は工具ヨコナデが施される。2は浅鉢の破片で、復元口徑23.0cmを測る。胎土は粗く、内外面10YR8/4浅黄橙色を呈す。粘土紐の接合痕跡が明瞭に残る。3は甕の口縁部破片と考えられ、地床炉周辺から出土した。胎土は粗く、10YR 7/3にぶい黄橙色を呈す。胴部から垂直に立ち上がりや外側に反する。4は甕の底部破片で底径6.7cmを測る。胎土は粗く、内外面10YR 7/3にぶい黄橙色を呈し、外面上に黒斑がある。外面上は不定ナデ、内面は工具タテナデ。5は甕の底部と考えられ、底径9.7cmを測る。粗い胎土で、10YR 7/3にぶい黄橙色を呈し、底部には木の葉紋が残る。

6～7は須恵器蓋である。6は復元径13.8cmを測り、焼成は普通、胎土は緻密で内外面5Y6/2灰オリーブ色を呈す。回転ヨコナデ、ツマミ付近は回転ヘラ削りで仕上げられる。口縁端部は短く折れシャープでない。7は蓋で宝珠形の扁平なツマミがつく。ツマミ径2.9cmを測る。胎土は粗く、細かい砂粒を多く含む。N6/灰色を呈す。

6. D区の調査 (Fig.2・3)

A. 遺跡の現況

本調査区は上妻遺跡である。都萬神社の北側に位置する。市道209号で狭幅の路線であることから、調査は困難を極めた。調査区の延長80m、調査面積64m²である。

B. 遺構と遺物

D-1～4地点：1地点から水道管敷設時の掘方で搅乱を受け、調査範囲の約半分は搅乱を受けていた。2地点では溝状遺構かと思われる掘方が2条検出されたが、検出面自体が疊層直上に堆積する層なので、かなり削平されており、掘方は浅い。格子目叩き痕が残る瓦破片が出土した。

第Ⅳ章 小結

本年度最も遺構が集中した調査区は堂ヶ鶴遺跡内で、市道293・294号上の1区とA区にあたる。出土遺物から推定できる年代としては古墳時代後期・平安時代・近世（18世紀後半）の遺構を検出した。

1-1～6地点、11～20地点では、竪穴住居跡を中心とした古墳時代後期の遺構と平安時代の溝状遺構・ピット群、上層に近世の包含層と溝状遺構を検出した。

特に竪穴住居跡に注目すると、2地点で検出した竪穴住居跡が6世紀中葉にあたると考えられるものである。13地点の竪穴住居跡からは、土師器壺・炉跡とTK209古型式の須恵器壊身破片が出土し、20地点では土師器壺や高杯にTK43型式の須恵器壊身が出土する。土師器と須恵器が共伴する事例で、併行関係を検討する資料になる。土師器の壺に関して特徴的なのは、叩き痕が残り、格子目叩きと平行叩きの2種がある点である。格子目叩き痕に関しては5世紀中葉にあたる西都市酒元遺跡出土資料の壺に類似があり、当地域の整作工具、技法が残存したものであろう。平行叩きの残る例も6世紀～7世紀代にかけて確認されている。この時期に至っても叩き痕の残る事例は、平成16年度の調査で遺物が確認されており、当地域の特徴であろう。

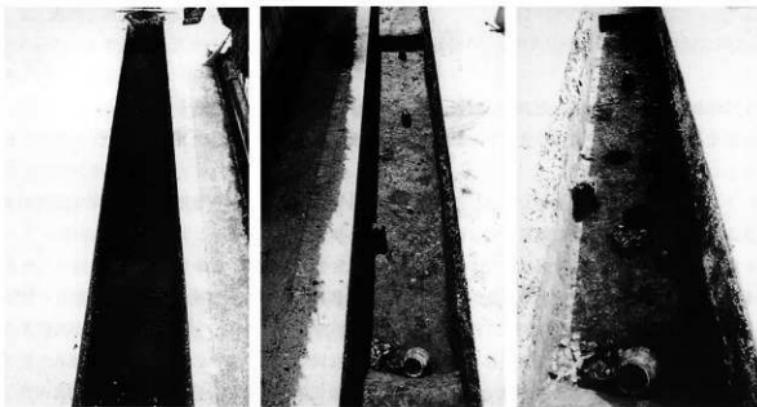
A-23・40・41地点において6世紀後半に位置づけられる竪穴住居跡を検出しておらず、堂ヶ鶴遺跡の市道293・294号沿い（今年度調査区間）は当該期の集落と評価できよう。平成12～13年度にかけて調査された堂ヶ鶴第2遺跡の地下式横穴墓群が6世紀末～7世紀前半段階に造営されており、消失円墳は6世紀中葉～後半に築造されたと考えられる。またA-37地点で検出された西都原245号墳の周溝と考えられる遺構から出土した模倣壊蓋は、6世紀中葉段階のものと考えられ、周辺に所在するこれらの古墳群と今回検出された竪穴住居群は同時期に比定できる。

同時に、この竪穴住居群を検出した路線に取り囲まれた台地側に位置するA-4～17地点においてはアカホヤ火山灰層といった地山が良好に残存するにもかかわらず、ほとんど遺構が検出されない空白地帯で注目できる。

この地区は中間台地の古墳と集落の関係を考える際に良好な資料となる。

また、A-28～29地点やA-45～50地点では谷状の地形落ち込みを検出し、自然流路跡と考えられる溝を多く確認した。西都原台地の麓から湧く水路が逢初川から稚児ヶ池に流れ込む谷がいくつも形成されていたと考えられ、この流路により、住居群や古墳群の所在する土地は島状に画されたものであったことが推測される。近世にはこの地に寺院が所在したと伝えられ、「堂ヶ鶴」なる地名の由来も地形に即したものであろう。

2区とB区は中間台地の東端にあたり、寺崎遺跡内である。市道1199号上になる。特に東側に因指定史跡日向国府跡が所在する2区は注意されたが、水道管敷設時の掘方で擾乱され、地形の残存状況は良くない。検出される遺構も室町期の遺構が主体であった。一部、平安時代に遡る溝状遺構が確認されたのは注意を要する。2-11地点では掘立柱建物を構成したと考えら得る2間の柱穴掘方を検出した。国府政庁域の北側にあたり、ピットの掘方埋土に灰白色の粘土を含む柱痕跡を確認できる。痕跡は径15cm程の規模であるが、古代における遺構群が現在の道路側にも伸びている可能性が高くなかった。



1. 1-2地点 遺構検出状況

2. 1-2地点 SA1

3. 1-2地点 SA1



4. 1-2地点 SA1 遺物出土状況



5. 1-2地点 SA1 土層断面



6. 1-13地点 遺構検出状況



7. 1-13地点 SA1・SA2



8. 1-13地点 SA2・SA1



1. 1—13地点 SA 2 炉跡（土器埋設）



2. 1—13地点 SA 2 土層断面



3. 1—14地点 SA 1



4. 1—14地点 SA 1 土層断面



5. 1—20地点 遺構検出状況



6. 1—20地点 SA 1



7. 1—20地点 SA 1 遺物出土状況



8. 1—20地点 SA 1 土層断面



1. 2-11地点遺構検出状況



2. 2-11地点 SB1



3. 2-11地点 SB1 土層断面1



4. 2-11地点 SB1 土層断面2



5. A-1地点遺構検出状況



6. A-1地点 SD1・SP1



7. A-23地点遺構検出状況



8. A-23地点 SA1



1. A-23地点 SA1 遺物出土状況



2. A-23地点 SA1 土層断面



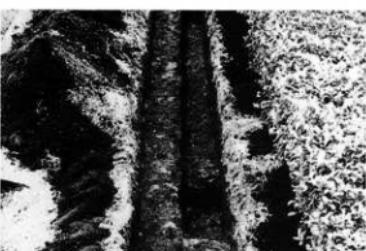
3. A-37地点 遺構検出状況（南から）



4. A-37地点 遺構検出状況



5. A-41地点 遺構検出状況



6. A-41地点 SA1



7. A-41地点 土層断面



8. C-5地点 遺構検出状況



1. C-5 地点 SE1



2. C-5 地点 SE1 土層断面



3. C-7 地点 遺構検出状況



4. C-7 地点 遺構検出状況（南から）



5. C-7 地点 SA1



6. C-7 地点 SA1 炉跡（土器埋設）



7. C-7 地点 SA1 土層断面



8. C-8 地点 遺構検出状況



9. C-8 地点 SA1 土層断面

報告書抄録

| | | | | | | | | |
|--------------------|--|--------------------|---|---|-------------|--|--|--|
| ふりがな | どうがしま かみつま てらさき どうじまる いしみき | | | | | | | |
| 書名 | 堂ヶ鳩遺跡、上妻遺跡、寺崎遺跡、童子丸遺跡、石貫遺跡 | | | | | | | |
| 副書名 | 妻北地区下水道敷設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書IV | | | | | | | |
| 卷次 | 第4集 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第54集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 津曲大祐 | | | | | | | |
| 編集機関 | 西都市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒881-8501 宮崎県西都市聖蹟町2丁目1番地 TEL 0983-43-1111 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 2008年3月21日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | | | |
| 堂ヶ鳩遺跡 | 宮崎県西都市 大字 | 1016 1017 | 日本測地系 32° 07' 21" 7753 32° 06' 32" 9279 | 日本測地系 131° 23' 39" 4448 131° 24' 23" 8717 | | | | |
| 寺崎遺跡 | 童子丸 | 1018 | 世界測地系 | 世界測地系 | 2007.06.28. | | | |
| 上妻遺跡 | 右松、童子丸 | 1021 | 32° 07' 34" 2110 | 131° 23' 30" 9237 | 2008.02.29. | | | |
| 童子丸遺跡 | 三宅外 | 1025 | 32° 06' 45" 3684 | 131° 24' 15" 3496 | | | | |
| 石貫遺跡 | | | | | | | | |
| 調査原因 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | | |
| 妻北地区下水道敷設事業に伴う発掘調査 | 散布地、集落跡、古墳群 | 古墳時代 後期・奈良・平安時代 | 古墳周溝、竪穴住居跡、溝状遺構 | 土師器・石錘・須恵器・磁器 | | | | |
| 調査面積 | 確認調査 | 本発掘調査 | | | | | | |
| | | 1366m ² | | | | | | |

『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第54集

堂ヶ嶋遺跡・上妻遺跡

童子丸遺跡・石貫遺跡

寺崎遺跡

平成20年3月21日発行

編集発行 西都市教育委員会

印刷所 ふくしげ印刷
